

ラサリーラー  
愛のマンダラ  
『バガヴァタ・プラーナ』の物語より

第3部  
多くの姿になる神

さて、月はより高く空に昇り、川を横切って輝く光の道を投げ掛けています。歓喜に満ちて、あらゆる星座、この世を越えた世界を見詰めながら、シュリー・クリシュナは回り続け、そこでは、神々がその踊りを見るために集まり、天上の音楽家たちはクリシュナの横笛に応じて音楽を奏でました。

地上では、ゴーピーたちが、クリシュナの周囲をまとまりのない円を描いて踊っていました。熱狂的な者もいれば、控えめな者もいれば、なまめかしい者もいれば、恥ずかしがりの者もいました。多くはクリシュナの気を引こうと彼に近寄っていきました。自信のない者たちは尻込みしました。クリシュナ神は慈悲深い心で、それぞれのゴーピーを見ていました。彼が演奏を速めるにつれて、ゴーピーたちの踊りも速くなりました。間もなく、ゴーピーたちは踊りの中に没頭し、クリシュナと共にいることのこの上ない喜びに没入しました。ゴーピーたち全員がクリシュナを切望し、そして突然、クリシュナは一人のクリシュナではなくなりました。何十人ものクリシュナになりました——一人一人のゴーピーにクリシュナがいたのです。ゴーピーたちは熱狂しました。それぞれがクリシュナを抱擁し、愛と喜びで幸福感にあふれました。それぞれが、クリシュナは自分だけのためにいると感じました——クリシュナは他のゴーピーたちよりも自分を選んだのだと。「私の美しさのためだ」と、一人が考えました。「私がとても優美な踊り手だから」と、二人目が考えました。「彼は永遠に私のものだ」と、三人目は考えました。

それぞれうぬぼれて独占欲の強い考えがゴーピーたちの頭に浮かんだ時、歓喜は衰え、彼女

たちの世界は変化しました。クリシュナはその場から消えてしまったのです。何人かのゴーピーは自分が木にしがみついていることに気づきました。自分を抱きしめている者もいました。皆がぼうぜんとし、当惑しました。乱れた服装と髪で、彼女たちはここで何をしていたのでしょうか。森さえも、少し前までは神秘的だったのに、今や冷たく空虚に思われます。風が失望のため息のように、木々の間でカサカサと音を立てています。

「彼はどこへ行ったの？ クリシュナはどこ？」と、一人が泣き叫びました。

「ついさっきまで、彼は私と踊っていたのに！」と、二人目が言いました。

「そんなことはあり得ない。彼は私といたわ」と、三人目が言いました。

「違う！ 彼は私といたのよ！」と、もう一人が言いました。

空き地の向こう端から、別のゴーピーが大声で言いました。「彼はこの道を行ったみたい。彼の足跡がある」

彼女は指さしました。確かに、川岸の柔らかい銀白の砂の上に、並んで二組の足跡がありました。大きい足跡と、それより小さな足跡が。

「誰かが彼と一緒に行ったのだわ！」

「レーザー！ レーザーはどこ？」

「そうだ、レーザーはどこ？」

彼女たちは見渡しました。レーザーの影も形もありません。彼女も他のゴーピーたちの間で踊っていたのに。

そして今、ゴーピーたちがクリシュナを失った苦しみは、嫉妬による鋭い心の痛みでさらに悪化しました。

「二人を追い掛けましょう！」

そこで、彼女たちは追い掛けました。川から森の中へ、砂の道をたどります。すると、先頭を行くゴーピーが突然動きを止め、他のゴーピーたちに歩みを緩めるよう腕を伸ばしました。

「見て！」と、彼女は言いました。

ゴーピーたちは集まりました。小さい方の足跡は途絶え、大きな方はより深く、はっきりと続いていました。

「ここからクリシュナは、レーザーを抱いて運んだに違いないわ！」と、先頭のゴーピーは言いました。

ゴーピーたちはうろたえて互いを見ました。クリシュナが花嫁を選んだことはよりはっきりしたようです。そして、彼の花嫁は、彼女たちの誰でもなかったのです。

